

科目名	開発政策論特殊研究	担当者	イチオカ 市岡 韶	タカシ タカシ	期間	通年	単位数	4
-----	-----------	-----	--------------	------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>本講座は、一般的な国際協力論や開発論で学ぶような、国際協力・開発に関する機構、制度、各分野での動向や課題を越え、開発そのものに内在する問題に肉薄することを目的とする。すなわち、一般的な国際協力論や開発論の知識や理解を前提として、メタな視点（一歩引いて遠い位置・高い位置から見る視点）から対象を見つめ直すことができるようになることを目的とする。</p> <p>メタな視線を持つことは、開発が行われる社会を冷めた目で見て突き放すものではなく、その社会に寄り添い、その社会を当事者にとってより良い場所にすることにつながるものである。</p> <p>具体的には、本講座において、開発関係機関の役割・行動や、開発の推進側と受け入れ側とのギャップについて考えることで、メタな視点を獲得することを目指す。</p>							
到達目標	<p>【一般目標 (GIO)】 開発論においてメタな視点を持つことの意味を理解し、メタな視点から開発に内在する問題について鋭く切り込むことができるようになる。</p> <p>【行動目標 (SBOs)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①教材・参考図書に示された事例から、開発の問題をメタな視点から見るとは具体的にどのようなことを理解する。(知識) ②開発の問題の中から「パズル」(「不可解な謎」。基本教材2のp.iv参照。)を見つけ出す想像力を身に着ける。(技能) ③開発をめぐる常識を疑い、建設的な批判精神を持って考察する姿勢を身に着ける。(態度) 							
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員と十分に意見交換をしながら進める。 ・リポート案についての受講者同士のディスカッションなど協働学修を取り入れる。(アクティブラーニング) ・具体的な事実に基づく考察が不可欠であるため、教材・参考図書以外の書籍、論文、記事等についても十分に調査を行う必要がある。国際開発学会等の学会誌に掲載された論文や、ネットメディアの記事もチェックすることが求められる。 <p>【学修方略 (LS) と学修時間】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材・参考図書を熟読し、そこで示された関連文献も参考にしつつ、リポートのドラフトを作成する。ドラフトの前にスケルトン(骨子案)を作成すると、考察を進めやすい。【15時間／リポート1本】 ・さらに考察を深め、リポートの初稿案を作成し提出する。教員との意見交換を行い、さらに材料を集めたり考察を深めるべきポイントについて指摘を受ける。受講者同士のディスカッションにより互いに学び合う場も設ける。【15時間／リポート1本】 ・教員からの指摘を踏まえて内容の修正・充実を図り、リポートの最終稿を完成させる。【15時間／リポート1本】 							
スケジュール	<ul style="list-style-type: none"> ①受講開始から約1か月後の時点でリポート作成の方向性が定まらない場合は、教員と意見交換を行うこと。 ②リポートの初稿提出前のスケルトンあるいはドラフトの段階で、教員と意見交換を行うことを推奨する。 ③最終稿提出までにリポート案を提出してもらい、複数回の意見交換を行っていくので、遅くとも最終稿提出期限の1か月前には初稿を提出すること。 ④最終稿提出期限は学事歴に従う。 							
成績評価	種別	割合	評価基準					
	リポート	80%	①教材の内容を十分に理解できているか。 ②教材以外の資料、文献等を十分に調査できているか。 ③独自の考察ができているか。 ④主張したいことを論理立てて明確に表現できているか。					
			①初稿提出の期限(最終稿提出の1か月前)が守られたか(減点項目)。 ②最終稿提出までに教員と複数回のリポート案の交換ができたか。					
履修者への要望	<p>大学院での学び全体に言えることであるが、特に本講座で学修するテーマは、答のない難しいテーマである。従って、常識や既成概念にとらわれることなく、自由な発想でオリジナルな切り口を見つけ、臆することなく自在に主張を展開していただきたい。</p> <p>なお、本講座では、一般的な国際協力論や開発論の知識や理解を前提として、さらにハイレベルな学修を行う。従って、博士前期課程の「国際協力論特講」をすでに受講しているか、自習により同講座の内容に相当する知識を身に着けていることが望ましい。</p>							

【リポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	<p>著者名： 松本悟・大芝亮編著 教材名： 『NGO から見た世界銀行 一市民社会と国際機構のはざまー』 (ミネルヴァ書房, 2013 年) ISBN:978-4-623-06503-5 3,800 円 + 税</p> <p>国際開発における世界銀行の役割については様々な議論があるが、本書は、世界銀行と関わってきた NGO の視点から見た世界銀行について論じるというユニークな方法論で構成されている。このような方法論を取ることで、本書は抽象論ではなくよりリアルに世界銀行の抱える課題を浮き彫りにしている。</p>
参考図書	<p>松本悟『調査と権力：世界銀行と「調査の失敗」』 (東京大学出版会, 2014 年) ISBN:978-4-13-040268-2 5,800 円 + 税</p>
履修上のポイント	世界銀行は国際開発に大きな役割を果たしているが、それは、様々な批判にさらされてきたように完全無欠の正義の味方ではないし、一方で、完全な悪役でもない。教材及び参考図書を参照した上で、中立的で無色透明な主体ではない世界銀行がどのような思惑をもって行動するのか、様々な関係者が世界銀行に何を求めるのか、また、それらのことが国際開発にどのような影響を及ぼすのかについて、自分でも材料を集めて調べ、考察を深めてもらいたい。
リポート課題 1	<p>現在の世界の状況、さらに今後の見通しを踏まえ、今後の国際社会における世界銀行の役割は何かについて論じる。 (5,000 字程度)</p> <p>留意点：教材を精読し、さらに、自分で教材の刊行 (2013 年) 以降の世界の状況変化について調べ、また、今後の変化についての見通しを立てた上で、論じる必要がある。</p>
リポート課題 2	<p>もしあなたが NGO を作り、世界銀行をよりよい方向に変えていく活動ができるとすれば、あなたは具体的にどのような活動をしていくかについて論じる。 (5,000 字程度)</p> <p>留意点： 教材では NGO の世界銀行に対する関わり方について三つの類型が示されている。これらのいずれの関わり方で臨むのかについて、まず決めてから論じる必要がある。</p>

基本教材 2	
教材の概要	<p>著者名： 佐藤仁 教材名： 『野蛮から生存の開発論：越境する援助のデザイン』 (ミネルヴァ書房, 2016 年) ISBN:978-4-623-07677-2 3,000 円 + 税</p> <p>開発論の分野では第一人者である筆者が、その研究歴の中で考察してきた様々なアイデアに関する論考をまとめたもの。開発に関する一般的な見方や常識を問い合わせるユニークな発想が豊富に盛り込まれている。筆者が開発の対象となる社会やそこにいる人々を冷めた目で見ているのではないことを理解する必要がある。</p>
参考図書	<p>松本悟・佐藤仁『国際協力と想像力：イメージと「現場」のせめぎあい』 (日本評論社, 2021 年) ISBN:978-4-535-55975-2 2,000 円 + 税</p>
履修上のポイント	開発の現場では、開発・援助を推進する側と受け入れる側との間の認識のギャップから、様々なずれ違いが生じている。そのようなギャップやずれ違いを発見するためには、開発の問題を「メタな視点」から見る必要がある。「メタな視点」とは、一步引いて遠い位置・高い位置から見る視点である。教材及び参考図書を精読した上で、「メタな視点」を自分なりに体得し、自分なりの「メタな視点」を持つことにトライしてもらいたい。
リポート課題 1	<p>開発をメタな視点から見ることは、実際の国際協力において可能か、また、開発をメタな視点から見ることによって、開発の対象となる社会をより良くすることができるかについて論じる。 (5,000 字程度)</p> <p>留意点： 教材及び参考図書の筆者たちが論じている問題を深堀りしてもよいが、別のメタな視点を見つけ出してもよい。</p>
リポート課題 2	<p>あなたにとって、開発をめぐる「パズル」（「不可解な謎」。教材 p. iv 参照。）とは何かを述べる。また、その「パズル」の答えは何だと思うかについて論じる。 (5,000 字程度)</p> <p>留意点：「パズル」は、開発一般に関することでも、特定の開発プロジェクトをに関する事でも、どちらでもよい。「パズル」の答えについては、複数の答えの可能性を論じてもよい。</p>

基本教材 1

第 1 回	「学ぶべき課題」について全体的な理解をしてから、教材に基づく学修①（世界銀行をめぐるこれまでの議論）を行う
第 2 回	「学修の進め方」について教員との意見交換を通じて理解し、教材に基づく学修②（NGO の視点からみること）を行う
第 3 回	教材 1 に基づく学修③（世界銀行と NGO の関係史）
第 4 回	教材 1 に基づく学修④（世界銀行と協働する NGO (1)）
第 5 回	教材 1 に基づく学修⑤（世界銀行と協働する NGO (2)）
第 6 回	教材 1 に基づく学修⑥（世界銀行に内から働きかける NGO (1)）
第 7 回	教材 1 に基づく学修⑦（世界銀行に内から働きかける NGO (2)）
第 8 回	教材 1 に基づく学修⑧（世界銀行に外から働きかける NGO (1)）
第 9 回	教材 1 に基づく学修⑨（世界銀行に外から働きかける NGO (2)）
第 10 回	教材 1 に基づく学修⑩（世界銀行の役割への展望）
第 11 回	リポート課題 1・2 について考察した内容をまとめ、初稿を提出する
第 12 回	リポート課題 1 について教員からのコメントを踏まえ再検討を行う
第 13 回	リポート課題 2 について教員からのコメントを踏まえ再検討を行う
第 14 回	リポート課題 1・2 について教員と意見交換を行い、内容の充実を図る
第 15 回	リポート課題 1・2 の最終案を教員と共有し、了承を得たうえで、最終稿を提出する

基本教材 2

第 1 回	「学ぶべき課題」について全体的な理解をしてから、教材に基づく学修①（開発研究への取組みのあり方）を行う
第 2 回	「学修の進め方」について教員との意見交換を通じて理解し、教材に基づく学修②（メタな視線）を行う
第 3 回	教材 2 に基づく学修③（生活の質とは）
第 4 回	教材 2 に基づく学修④（貧困とは）
第 5 回	教材 2 に基づく学修⑤（事例研究の意義）
第 6 回	教材 2 に基づく学修⑥（分業が生み出すもの）
第 7 回	教材 2 に基づく学修⑦（「想定外」とは）
第 8 回	教材 2 に基づく学修⑧（届かない援助）
第 9 回	教材 2 に基づく学修⑨（資源の呪い）
第 10 回	教材 2 に基づく学修⑩（援助の「日本モデル」）
第 11 回	リポート課題 1・2 について考察した内容をまとめ、初稿を提出する
第 12 回	リポート課題 1 について教員からのコメントを踏まえ再検討を行う
第 13 回	リポート課題 2 について教員からのコメントを踏まえ再検討を行う
第 14 回	リポート課題 1・2 について教員と意見交換を行い、内容の充実を図る
第 15 回	リポート課題 1・2 の最終案を教員と共有し、了承を得たうえで、最終稿を提出する